



西宮は文楽の源流「傀儡師」発祥の地といわれ、文楽と大変縁の深い町です。同時に西宮は全国有数の「酒どころ」でもあります。この「酒」と「文楽」という西宮を語るに欠かせない二つの要素を、造り酒屋において同時にお楽しみいただこうというのが、「酒屋万来文楽」です。2008年に西宮在住の人間国宝の人形遣い、吉田文雀さんを中心とした文楽の会として発足し、出演者である文雀さんご自身の全面的なご協力のもとスタートした本企画も今年で18回目となります。今回は、「平曲」という日本の代表的な〈語り〉を生んだ『平家物語』を主題に、能・狂言・文楽・講談の「語り芸」としての魅力に迫る企画の第一弾としてお届けいたしました。文楽の演目として取り上げたのは、「平家女護島（へいけによごのしま）鬼界ヶ島の段」、通称『俊寛』です。



俊寛 吉田和生 丹波少将成経 吉田玉誉



妹尾太郎兼康 吉田玉佳 丹左衛門基康 吉田玉勢



千鳥 吉田簗紫郎



同じく平家物語巻三の「足摺（あしずり）」を本説とする能の「俊寛」では、島に置き去りにされる俊寛の絶望感に焦点をあて、人間の極限状態の心理を描写しましたが、その約 300 年後の近松は、「本当は、俊寛も許されていて帰ることもできた」という脚色のもと、自ら他人の身代りになって島に残る選択をしたという筋書きにしました。しかし、いざその現実と直面すると、島に残される寂しさに、激しく苛まれます。



「思い切っても凡夫心」と、抑えていた思いが全身を突き抜け、絶望感に苛まれる俊寛。岸の高見に駆け上がり、松の一本につかまって遠ざかる船を見送りつつ身悶えします。



太夫 竹本鋳太夫      三味線 鶴澤藤蔵



文楽公演に続く後半の「文楽の手ほどき」では、再び吉田和生師にご登場いただき、主、左、足遣いの連携について、人形遣いの修行、心得などについて、来場者のご質問に答える形で、貴重なお話をうかがいました。後進の育成と文楽の未来に心をくだく和生師の訥々とした語り口に、一同しみじみと聞き入っていました。